

「英語で英語を教える」その先に

韓国とアメリカの事例から日本の英語教育の問題点と解決策を探る

沼津市立沼津高等学校 林 慈子
(研修時:静岡県立富岳館高等学校)

「英語の授業は原則として英語で行うこととする」とした新学習指導要領が実施されて3年が経過した。その間、現場の教員として研修・研究に努めてきたが、自分自身が英語で英語を教わるという経験をしたことがない中で、新たな授業スタイルを見出すことはなかなか容易でなかった。そこで、英語による英語教育を導入して成果を上げた韓国と、長年非英語母語者への英語教育を行っているアメリカを訪問し、その英語教育の実際を視察したいと考えた。

国を挙げての英語教育熱

韓国の英語レベルは以前は日本のそれと大差ないものだったが、近年は大きく躍進し日本を遙かに凌ぐ成果を上げている。何が違いを生み出しているのかとソウル市の小・中・高校や近郊の英語村を訪問した。一教室あたりの生徒数や英語の授業時数など日本と変わらないことも多い中、印象に残ったのは学校・家庭・政府それぞれの英語教育への熱心さと連携の良さだった。国や自治体はネイティブ講師の招聘や教材及び情報機器の充実、英語村への資金援助など、国を挙げて英語力を向上させようとしており、こうした国の姿勢と、子どもの教育に日本以上に投資する親たち、競争社会の中で生き残りをかけて勤勉に努力する子ども達、

そうした力が相まって韓国の英語教育改革が成功したのだと感じた。

「英語は英語で」が当たり前

実はアメリカ国内には英語学習者が多く存在する。移民や留学生など英語を母語としない人々が毎年流入する中、教育機関は彼らに英語で英語を教えてきた。カリフォルニアのカレッジ・高校・語学学校を訪問し様々な英語レベルのクラスを観たが、どこでもごく自然に英語で英語を教えていた。確かにここは英語の国であり、学習者の母語は同一ではないから、英語「を」学ぶ必要性も、英語「で」学ぶ必然性も、日本の学校教育でのそれより格段に高い。それだけに、テキストや学習法も様々に研究されており、実際に日本で授業を行う上で参考になることも非常に多かった。

日本の英語教育の問題点

この研修を通して感じたのは、日本



アメリカ:語学学校の様子。様々な国籍の生徒が学ぶ

は教育資源をもっと有効に使わねばならないということだ。世界には優れた英語学習のテキストが存在するのに、なぜ不十分な日本の検定教科書を使わなければならないのか。英語が受験英語を脱却しコミュニケーションのツールになっていく中、今後は「何を」「どう」語るかが重要になってくるが、教科書はそれに対応できているとは言えない。現場を担う教員のレベルアップも欠かせない。韓国では改革の一環として全ての教員に相当量の研修を行ったが、日本では未だその規模ではない。

英語教育を本当に変えられるかどうかは、生徒や教師の努力だけの問題ではない。韓国が国を挙げて教育改革に取り組み成果を上げたように、日本も学校のみならず家庭や教育行政や産業界を巻き込んで進めていかなければ、改革はなかなか難しいだろう。言い換えれば、国家としてどれだけ本気で英語教育を変えようとしているかが問われているのではないだろうか。



韓国:小学校の様子。常勤のネイティブの先生と韓国人の先生が教える

英語教育の先進国ブータンから、日本の英語教育を考える

沼津市立片浜小学校 鈴木 歩美
(研修時:沼津市立大岡南小学校)

グローバル化に対応した英語教育改善として、日本では2020年に小学校において英語が教科化されることが決定した。それに伴い、現在では小学校教員の英語研修や外国語活動の授業内容の見直しなど、教科化に向けて小学校英語教育は大きく動き出している。そこで、英語教育の先進国であるブータンの学校を訪れることで、今後の日本の英語教育へのヒントを得ることができると考えた。

ブータン英語教育の背景

ブータンには母国語のゾンカ語が存在しているが、学校では英語教育が盛んに行われている。また、母国語以外の教科の授業を英語で行っている。なぜなら、母国語であるゾンカ語には数学用語や科学用語などの専門用語が存在しないからだ。ブータンでは様々な学問を学ぶために、英語教育は必要不可欠なのである。

現在ブータンでは、母国語で学問を学んだりゾンカ語で本を書いたり読んだりすることができるように、ゾンカ語を増やしている最中である。ブータンの英語教育はグローバル化に対応した言語教育というよりも、教育の前提に英語教育が存在していることが分かる。

英語を学ぶ必然性を子どもたちに

ブータンでは、幼い子どもたちに英

語を学ばせるために環境づくりを大事にしている。まずは教室環境である。教室内の掲示物は全て英語のアルファベットや英語で書かれたものであったり、学校目標や教育方針、子どもたちの作成したポスターなどの掲示物も全て英語で書かれていたり、常に英語が身近にあるよう環境づくりがされている。つぎに、英語を日常的に聞く・話す環境づくりである。先生方は子どもたちに伝わっているかいないかに関わらずほとんどの指示を英語で行っている。校内では友達との会話、教師との会話を英語限定にするルールがある学校もあり、英語を日常に取り入れることで英語を学ぶ必要性を感じさせていた。

母国語への苦手意識

子どもたちは小学校入学前から英語を学習していることにより、ゾンカ語よりも英語のほうが得意になってしまい、母国語の学習を苦手と感じてしまっている。このことを国も危惧し、



庭庭で椅子取りゲーム。教師の指示は英語

近年ではゾンカ語の授業を増やすなどカリキュラムの改正を行ったようだ。GNH政策の中で「伝統文化の保全と促進」を掲げているブータンだが、英語教育を推奨してきたことにより、人々の母国語への愛着が薄れているという問題も抱えている。

日本の英語教育に生かす

ブータンと日本では英語教育を行う意義に相違があり、ブータンでの英語教育をそのまま日本で実践することは難しい。そこで日本ですぐに実践できることとして、①子どもたちがすぐに使える英語から教えること、②教師が日本語を使わないようにすること、③英語での掲示を行うこと、の3点を考え実践している。小学1年生の学級では、この実践により子どもたちの英語を「使いたい・聞きたい」という意欲が強くなってきている。こういった実践を継続し、今後の英語教科化へ向けて小学校英語教育を見直し、改善していきたい。



民族衣装を着て登校する1年生の子どもたち